

総括パネル

統合報告時代における
戦略的企業経営

METIのスタンス： 非財務情報開示への対応

- 非財務情報報告・情報発信の必要性の高まり
 - IFRS適用によって避けられない原則主義への対応。企業にとっての説明責任を果たすツールの提供。
 - 予測見積もり会計の増大への対応。監査環境の安定。
 - 短期志向への対抗。長期的な視点の経営のアピール。
- 国際的な統合報告の流れへの対応。
 - 開示の非効率回避。企業価値を真に高める努力を企業側に求めることが可能に。
 - IIRC等グローバルスタンダードへの早期対応。
 - 日本の発行体の強み発信、弱みの補完
 - 環境技術開発等の長期的な視点の経営、ゴーイングコンサーン（短期的な利益追求ではないビジネスモデル）
 - 震災後のサプライチェーン等のリスク情報開示の要求

METIのスタンス： WICIの活動への期待

- 企業価値を高めるという視点からのモデル構築、IIRCへの意見発信
 - 企業内部から見た場合の包括性
 - 戦略という観点からのプライオリティ付け
 - 中長期視点の投資家への訴求
 - 企業の自由裁量、こまかな縛りの回避
- 中長期的な視点に立った企業と投資家のコミュニケーションの実際の改善

論点 1

1) IFRSによる財務報告へと進む発行体の増加が見通されるなか、IFRSへの移行により、企業経営のあり方に少なからぬ影響が及びます。考えられる影響と、その対処策としてIASBのMCあるいはIIRCの《IR》は、どのような役割を果たしうるのか？

影響を及ぼす要因としては、次のことが考えられる。

- ① 細則主義から原則主義への転換
- ② 予測・見積もり会計の拡大
- ③ スtockアプローチにともなう短期志向への傾斜

論点 2

2)《IR》は、発行体の開示へ屋上屋を重ね、新たな負担を課すものなのか、それともインタラクティブ・コミュニケーションが進展する時代における企業の戦略遂行の不可欠なツールになるのか？

検討するポイントとして次のことが考えられる。

- ①日本の発行体における開示の非効率性(読み切れないデータの提供はノイズの発信でしかない)
- ②《IR》のデファクト・スタンダード化を進めるIIRCの動きへの対応(日本企業の開示実態を踏まえた負担の少ない統合報告への進め方)
- ③大震災後に高まっているリスク情報への関心の高まりへの対応

論点 3

3) IIRCが提唱する《IR》のDPの論理の根本には、WICIのこれまでの調査研究を踏まえて主張するポイントが反映されているが、WICIが主張する重要なポイントのうち活かされていないものもある。今後のWICIが取り組み姿勢と取り組む課題は何か？

検討するポイントとして次のことが考えられる。

- ①何が反映されたのか、活かされていない重要なポイントは何か？
- ②今後、それをIIRCに反映させることに、どのように取り組むのか？
- ③グローバルおよびリージョナルそれぞれにおいて統合報告を推進するうえで、WICIが果たす役割は何か？